

特集にあたって

二階 宏之

書店で『幻想古書店で珈琲を』という文庫本を手にした。古書店を題材にしたファンタジー小説である。物語では魔法使いの古書店主が登場し、縁を失くした人の人生を本にしてしまう。この小説のように古書店とは謎めいていて、馴染みが薄い人にとっては足を踏み入れにくい場所である。一方、ネット販売で書籍を購入することがライフスタイルとして定着し、中古本を抵抗なく受け入れてきていることも事実であろう。小説では古書店でありながら甘い香りの珈琲をサービスするという舞台設定になっている。レトロ感覚に新鮮味をプラスした着想は、今まさしく古書店界にも浸透しつつある風潮である。

個性的な店が増えてきている。店内で珈琲を出したり、特色ある雑貨を販売したり、貴重書や骨董品を展示したりするなど、新しい楽しみ方が増えた。一方、老舗の古書店はというと、店構えは旧態依然のままであるが、やはり昨今の出版事情や流通事情の変化に対応する経営を迫られているようだ。また、地価高騰で店舗を拡大することも難しく、店主の高齢化で跡継ぎ問題も深刻となっている。

書店はというと、新古書を扱うチーン店やネット書店などの出現で価格競争の波にさらされている。アジア各国の古書事情はどうであるのか。もともと開発途上国では出版部数が少ないために、新刊が在庫切れになると古書店に求めに行くという流れがあった。研究者にとつては、専門知識を持つ古書店主に出会えるか否かで情報収集の幅が大きく違ってくる。特に外国人は図書館での利用に制限が多いため、古書店は研究の命の綱だ。店主との信頼関係が構築できれば、店主は希望する本を集めてくれ、目録も作成してくれる。古書店側にとつても学術書の国内需要が少ないために、外国人はお得意様である。古書店では本を売るだけではない。そこに集まる研究者達の交流や情報交換の場としての機能も持ち合わせる。一方、近年の店舗

数の減少は日本とも共通する問題である。インターネットの普及でネット販売が増加し、従来の店舗書店からネット書店へと主流が変わりつつある。取引形態も多様化し、個人が参入することで書店を介さずに売買する方法も出てきた。さらに、地価高騰で安い場所や地方に移動するか、廃業せざるを得ない状況である。

本特集は、ネット時代で古書市場が変化するなかでアジア各国の古書店の実態がどうなっているのか、また研究者からみた古書店はどのような存在なのかを現地での経験をもとに執筆していただいた。本文のなかで古書と古本という二つの表現が出てくるが、両者の定義が明確ではないため、本特集では同様の意味として使用する。あえていえば古書が専門書や貴重書類、古本が一般書という捉え方になるのであろうか。古書は人から人へ渡り歩いて価値を受け継いでいく。古書を発掘し、流通させ、価値を高めていくことは、古書店主の手腕と研究者のあくなき追求の共存のもとに実現する所産なのではないか。

(にかい ひろゆき/アジア経済研究所 図書館 研究情報レファレンス課課長)